

市民にとっての高規格堤防 —沿川にお住まいの方々へのインタビュー—

江戸川区平井七丁目地区（荒川） 小池友一さん

「スーパー堤防」そんなもの最初は反対に決まっただよ。そんなもの面倒くさいよね！今まで平穩無事に暮らしているところをさ、「どけー！」と言うんだから。「堤防をがっちり壊れないように丈夫にするって言って、一緒に区画整理するんだから、みんな一回どいてよ！」って言うんだからね。それはもう、精神的な負担もあるだろうし、金銭的な負担もあるだろうから、誰も賛成なんかしないよ。「俺んちは年寄りばかりだから！」とか、「俺んちはまだ子供が小さいから、学校の通学区域が変わっちゃうよ！」とか、もうそういうことばかりさ。でもさ、この地域にはいろんな問題をみんなで話し合う土壤もあってさ、「国がやってくれんだったら、やってもらったほうがいいんじゃないの」「いろんな課題をみんなきれいにしてくれんだったら、やったらいいよ！」てことになったのさ。でも進めるうちにはいろいろ意見が出てさ、あーでもない、こーでもないって、「でも、どうせここにいる人はみんな死んじゃうんだから良いんじゃないの。自分達のためでなく次の人たちのためにやることでしょ。ここであと何十年も生きてる人もいるかもしれないが、もうすぐ死ぬ人もいます。でも後々自分だけ良ければ良いというのじゃなくて、日本の国民として後々のことも考えてよ！」と言う事さ。いろいろあっても、ここは結局良いところになったさ。すっかり良いところになりましたよ。だからスーパー堤防の予定地でまだやってないところの人はどんどんやったら良いのさ。ここに住まわせてもらうのは、日本という国があって、土地があって、ここで命をもらって生かしてもらっているんだと思えば、次の人たちのために何をしなければならぬかはすぐに分かるでしょう。それを、最近では「土地は自分のものだ」という人も出てきちゃって、最近の人は独りよがりなんだよ。自分の生きてる間だけじゃなくていろいろ後々のことも考えてやらなくちゃ。大体土地なんてお墓に持っていけないでしょう。

自分のものじゃないよ、生きてる間だけ借りてるんだよ。今の私たちがやったことは後々の人が判断することだからさ、良いと思ったことは次の世代のためにやっておかなきゃね。

スーパー堤防の上ってのは川は見下ろせるし、第一、夜でも安心して寝ていられる良いところだから、事業の途中で家売って出ていった人の中で、やっぱりここが良いって、別の区画が売りに出されたのを購入してまた戻ってきて、ここに住んでいる人もいるんだよ。私らにしてみれば本当にやって貰って良かった。多少の反対があるのは何でも一緒さ。でも最終的にはみんな良かったって言うことになるって！時々「スーパー堤防はお金が掛かりすぎるから、他の事業を全部止めなければならぬ」なんて脅かす人がいるけどさ、全部やったって今じゃ規模も小さくなってから、いくらでもないでしょ。ここだって40億円で出来たし、少しづつでもやり続けて100年かかって200年かかってやるんだよ！続けて行って、それで絶対に水害の無いところにするんだということが大事なんだよ。途中で止めろとか、無駄使いだとか言う人がいたけど、それじゃ今生きている責任を果たせないよ！和歌山県で私財をなげうって津波防波堤を作った「稲むらの火」って話があるけどさ、スーパー堤防に協力することって言うのはそういうことさ。自分達の家が高台になるって言うことばかりではなく、ここは堤防が丈夫になることで守られる人たちのほうがはるかに多くの人住んでいる地域なんだよ。毎年毎年数十メートルづつでも続けていけば終わるさ。出来る範囲で、少しでもやらなくちゃいけないでしょう。これが日本沈没のようになっちゃうからやらなくても良いんだ、というならそれでも良いかもしれないけど、そうはいかないでしょう。そう簡単に日本を捨てるわけにはいかないでしょう。大体水害なんてさ自分が生きてるうちに経験することなんて少なくなって来ちゃったから、大変なことが起こってから大騒ぎしているんだよ。

水害なんていつ来るか分からないでしょう。地

自分も最初は良く分からなかったからすぐには賛成しなかったけれど、よくよく話を聞いてみると良いことばかりで、この地域の問題点がうまく解決できる事業だと理解できたので、賛成することにしました。でも今はずいぶんと時間がかかったなと感じています。国と区の共同事業なので予算的にも協力し合って支出するので、結局は10年掛かってしまった。でも、最終的にこの事業は成功だったと思います。狭い地域に木造住宅がびっしりと建っていた。言ってみれば空き家もあって限界集落のようなところを、とにかく安心して安全で明るい町にするのだという目標は、完全に達成したと思います。道路もきれいに出来上がったし、町としての美しさも向上したと思う。時間が掛かったということ以外は文句は無いです。

まちづくりとしても成功だと思えます。なぜかというスーパー堤防が始まる前までは、子や孫の世代がどんどん出て行って、高齢者が増えてしまっていた。このまちづくりのおかげで道路が広がり、新しい建物はこれまでよりも大きく建てることも出来るようになり、子や孫の世代が戻ってくるようになって、町がきれいになった安全になったと同時に、町が若返ったのです。先行買取で抜けた宅地も新たに売却される時は、これから住宅が必要な世代が購入するので、全体の住民構成が相当若返ると思えます。町自体を全く再生できたと思うのです。そしてきれいになったこの町全体がスーパー堤防になり、今後も存在し続けることに社会的意義があると思うのです。これからが出発点なのです。国や区が税金をつぎ込んで造ったわけだから、洪水が来るたびに地震が起こるたびに、国民から見られ続ける場所なのです。「あそこは大丈夫なのか？」ということですね！そういう意義のある町なのだから、国も江戸川区もそのことを宣伝し続けなければならないと思うのです。俺らの家だから自分の土地だから何をやっても自分の勝手だということになれば、スーパー堤防が悪い評価を得ることになってしまう。そのことを意識し続けることが私たち住民の使命です。

ここのスーパー堤防も最初は住民ではなくマスコミから、時間が掛かる事業は無駄だというキャンペーンが起こってしまって、住民同士の話し合いが出来ないような状況になってしまった。でもそこで区役所がここのまちづくりは住民同士の話し合いこそが大切だと、そういう話し合いの場をたくさん作ってくれた。その結果このスーパー堤防事業は成功したと思います。その要因はまず、住民が話し合うことで、この事業は町が良くなる

ことなんだと理解できたこと。また、マスコミや世間の風評ではこの地域は賛成派と反対派が対立しているようにまくし立てられていましたが、実はこの地域の住民は長い間ここに住んでいる人がたくさんいたので、幼馴染や小さいころから育っていく様子を知っている人や、お父さんやお母さんの世代には世話になったお年寄りの先輩がいるという関係が維持されていた。そこでお互いに徹底的に攻めるのは止めようということになったことだと思えます。あいつは子供のころから知っているんだよ。あいつのお母さんにはずいぶん良くして貰ったんだよ。ということで地域の中では決定的な対立にはならなかったのです。外部からたくさんの方が入ってきたり裁判も起こされたり、区議会や都議会、国会でもいろいろ言われたけど、それは地域住民の争いではなく、外の人たちの戦いだという感じでした。ちなみに反対の先頭にいる人にとって、町で出会えばみんなニコニコと話していたんです。ここは100戸足らずの住民しか居らず、反対しているのは10戸に満たないという状況でしたが、私たちの話し合いの場では賛成反対の人たちがお互いに、個人攻撃は一切しなかった。その分区役所に向けて反対の人たちが個人的にまで、徹底的に攻撃までしていたよね。マスコミの記事も反対派の記事だけになってしまって、賛成の人たちのほうが圧倒的だったのに、そのことは世間に伝わっていかなかった。だから北小岩のスーパー堤防は住民が全員反対なのに強制的に進めているように取り上げられてしまった。議会もきちんとした取材ではなく、マスコミの情報だけで議論するから噂話を議論しているように感じていました。

そんな状況で江戸川区の担当者は大変だったと思います。今後スーパー堤防を継続していくためには、とても大事なことがあります。役所の人には人事異動があるので2~3年で変わってしまうでしょう。それはどうしても無いことなのかもしれないが、住民の側からしてみると「自分の人生の全てをさらけ出して相談したのに、担当者がいなくなってしまった。また今度の人にも自分のことをさらけ出さなければならないのか？」と不安になるのです。だんだん胸襟を開いて相談できなくなってしまいます。今度の人はいつまでここにいてくれんだろうかとね。だからせめて責任を持てるポジションの人には継続して担当してもらいたいと思います。だから役所の組織としてそれが難しいならば「フォローグループ」というような組織があれば良いなと思います。担

当の人が変わることによって「我が家の恥をまた今度の人にも曝さなければいけないのか？」という不安感を取り除けると思います。それに私たちは年を取っていくけど役所の担当者はどんどん若返ってしまうので、どんどん話しづらくなる。事業の段階によって補償の話から税金、建築、福祉、生活再建など変わっていく。このような話も、変わらない担当者を信頼してサポートできるようにして欲しい。深い話をしようとすればするほど「フォローグループ」が必要だと思う。そのグループは住民を回って、いろいろ相談を聴いて廻ることが大切だと思う。

今後スーパー堤防を進めていくためには、最初の段階でスーパー堤防を行うと何が良くて、何が大変なのか上手に住民に伝えて欲しい。事業を始める段階になってから、河川の話聞くのでは事業の本質と大切さがうまく伝わらない。まちづくりや移転の話が始まってしまうと、そちらのほうに関心が移ってしまうからです。移転の金額などの話が始めれば、身につまされた話のほうを、優先しなければならなくなってしまうのです。

さらにここで取り入れてもらった先行買取方式はとても良いことだと思うが、3年も仮住居に移らなくても、すぐにどこでも生活再建が出来るという良さをきちんと理解してもらおう努力が必要だと思う。

このまちの大切なことは、約50年程度でスーパー堤防が出来上がった後、壊れない堤防が出来て江戸川区全体が洪水から安全になることで、このまちの事業が最終段階を迎えるということなんです。それまでは北小岩の事業は完了したとは言えないんです。120km全体が終わるまでこの事業は続けなければいけない事業なんです。それが国民を守るとのことなんです。



森田さん夫妻



着手前北小岩地区（撮影土屋）

大阪市都島区大東地区（淀川）

上田保積さん、河本美美子さん、吉川美穂さん

【上田さん】 この団地の建物は全て津波の避難所に指定されました。津波は梅田の方から攻めてくるんですが、今まで1回もありませんし、もしあったとしても大したことないと思うんですよ。それよりも淀川の水の方が2倍も3倍も怖いでしょうね。近年でも淀川で洪水が発生したことがあるんですよ。そのときはもうすごいものでしたわ。河川敷はテニスコートであろうと何であろうと、もう使えなくなっちゃってね。すごいもんでしたよ。

【上田さん】 こんなのは私らが考える必要は少しもないことだけれども、大水が出た場合、ここはスーパー堤防にはなっているとはいうものの、1つのコブができていただけのことですよ。水の勢いで一番やられそうなのはコブの上流側と下流側の法面ですわ。スーパー堤防は、本当は幅が広いのがずっと長くてスーパー堤防ですわ。最終的には連続して整備しないとね。ただ、そうしようと思うと、やっぱり大きな問題ありますわね。現在民家がいっぱいあるっていうことで。それがネックやろうな。それが全部どこかへ、ええところへ引っ越してくれるなり、この上に上がってくれるというものであればええけども、それはそれでまたいろんな問題が生じてきますからね。スーパー堤防そのものはええ考えですわね。少しも悪いことはないですよ。強くするんだからね。これほどいいことはないけれども、そういうネックを乗り越える必要はあるな。

【上田さん】 スーパー堤防の上の棟は、眺めはいいですわ。何しろ180度見えますからね。六甲、北摂から京都、比叡山まで見えるんですから。

【河本さん】 ここは100万ドルの眺めです。

【吉川さん】 みんないろんな夢を持ってここへ来て「あぁいいわ」って言わはるの。

【吉川さん】 スーパー堤防の上の区画に住んでる人は、当然階段で上がることは承知の上で住んであります。でも淀川に一番近い棟の人たちは自転車持って上がるのが大変です。だからスーパー堤防の法尻に近い10号棟の前にいっぱい駐輪しておられます。10号棟に住まわれている方がしょっちゅう電話くれはるんですね。この方が「もし何かあって救急隊が来ようにも、この10号棟のエレベーターまで担架積んでどうやって入るの」っていうぐらい、いっぱいとまっています。これから年齢を重ねれば本当にいろんなことが出てくると思います。

【上田さん】 一番やらなきゃいけないことは、ここに専用のエレベーターをつけることやね。少しでも楽にさせてあげられることを考えなければね。一々あんなところを年寄りなんか大変ですよ。よう上らへん。

【上田さん】 もともとの堤防天端と淀川沿いの棟の間の土地は、公園ということになってはいますが、私はその子供たちが使えるような施設をつくらないと、何の意味もないと思うんですよ。もちろん、スーパー堤防は、子供たちを遊ばせるためにやったわけじゃないだろうとは思いますが、しかし、建物をつくってやるからには、やはり子供たちの遊び場所というのをつくらなきゃいけないと思う。この辺でいっぱい遊んでいますよ。絶対に球技をするなというところばかりですわ。だから、もしも球技ができるん

やったら、ここをそういうふうにする以外ないと思うんです。

【吉川さん】 今ボールどこも使えなくなったから、ボールの事故が少なくなったんですよ。上田さんは子供のために言われているんですけども、大半の人が使える公園となれば、ボールなんか禁止にするしかないんですよ。

【上田さん】 そういうのが駄目であれば、大きな木を植えて公園らしい公園にせなあかんと思うんです。その公園を利用して子育ての場所にできるとか考えなあかんです。

【吉川さん】 上田さん、ここに四角いテーブルみたいなのがあったでしょう。もう今ないでしょう。何で取ったというたら、どこからかここにやんちゃな人間がいっぱい集まるんですよ、夜中。ほんで、誰かが言うたんでしょうね、結局は取って。なかったらなかったで来ないんですよ、やっぱり。難しいんですよ。

【上田さん】 難しい。来てはいけない人も来るからな。



左から 吉川さん、上田さん、河本さん

聞き手：技術参与 土屋 信行
主席研究員 光橋 尚司



完成後の淀川大東地区